葛　城

被爆体験記

（2　号）

庄原市山内地区原爆被害者の会

葛　城

かつらぎ

被爆体験記

（2　号）

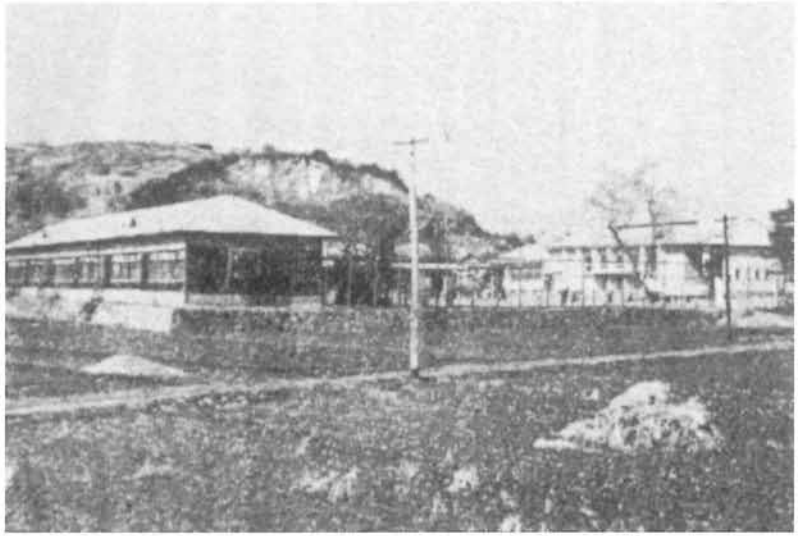
庄原市山内地区原爆被害者の会

現在の戸坂駅

現在の志和駅

山内原爆犠牲者慰霊碑

戸坂小学校講堂と村役場（右）（昭和29年に尻田へ移転）



戸坂小学校（昭和30年ごろ）

中国新聞　2002年（平成14年）８月６日（火曜日）（芸北・備北版）

大工さんの慰霊 竹製燭台

被爆者救護 母に背負われ…継承の夏

88人分 きょう法要に

庄原の国川さん

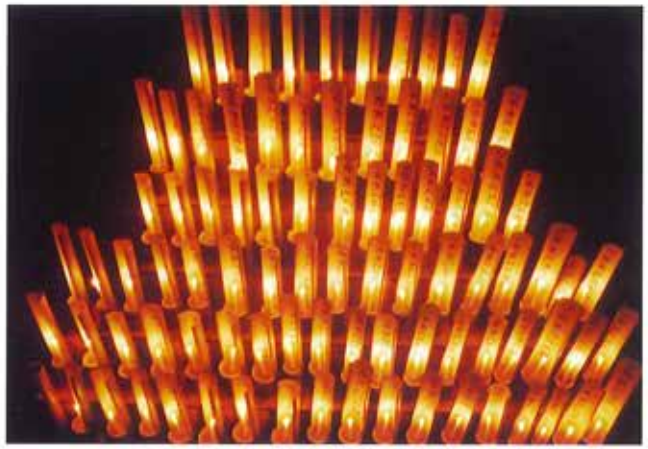
山内西国民学校でむくなった原爆被害者数と同じ数の燭台づくりに取り組む国川さん

庄原市山内町で六日にあるお盆の原爆被害者慰霊法要で使う竹製の燭台を、地元の大工、国川勇さんさんが手づくりした。燭台の数は、原爆投下直後に当時の山内西国民学校に収容され、死亡した被爆者の数と同じ八十八。「平和を願う広島の灯火」との思いを託した。

材料の直径十数センチのマダケは、犠牲者をたびに付した数。その竹筒は山から切り出した。燭台の高さは約四十センチ。筒から約五センチ上は半円筒状に、ノコギリで切り落とす。内側には、妻の五月枝さんさんとともに「南無阿弥陀仏」と書き込み、半日がかりで完成した。

法要では、原爆被害者の碑の横に置く六段の木製の祭壇に並べ、それぞれにろうそくを立てる。燭台づくりは今年で三年目になる。

勇さんの母、故スマエさんは、二歳だった勇さんを背負って毎日のように原爆者の救護に国民学校に出向いたという。原爆の世話役が高齢化し、法要の参列者も減ってきている中、勇さんは「そろそろ私たちが引き継ぐ世代。追悼につながる灯かに取り組むことが、若い世代に広まれば」と話している。



（倉敷市　内田栄一氏画）

目次

被爆体験記葛城二号の発刊にあたって……会長　加藤　照明　1
被爆体験記「葛城二号」の発刊によせて……庄原市長　滝口　李彦　3
被爆証言……広島市　高柴トヨ子　5
被爆証言……匿名希望　13
被爆体験証言……岡山県倉敷市　内田　栄一　20
被爆証言……広島市安佐北区　川地トシエ　25
当時の戸坂国民学校……森田トシエ　31
思い出……水越町　森田トシエ　37
葛城によせて……山内町　片山ハルエ　39
忘れられない思い出……水越町　藤川ミツノ　41
―五十八年前の看病を通して―……水越町　池田トキワ　43
忘れ得ない五十八年前の夏……庄原市　小川ひふみ　44
被爆者の方より感謝のことば……福山市草戸町　渡部　美香　49
母の霊碑に参拝して……畑中　純恵　51
後記……55

表紙写真：中国新聞社提供

被爆体験記葛城二号の発刊にあたって

山内地区原爆被害者の会会長　加藤照明

平成十四年七月葛城第一号を発刊致しましたところ、報道機関、又は口コミに依って、大変御好評を頂き、併せて心のこもった夛くの礼状を戴きまして有難く感謝致しております。

第二号では遺族の方々を始め、被災された被爆者が、旧国鉄芸備線で山内駅迄輸送された車内の様子、又山内地区で旧広島陸軍病院の分院として、庄原病院が指定され、山内病棟（山内西国民学校）で多くの軍関係被爆者が、手厚い看護を受けて夫々の故郷で、高齢を迎え生存されておられる方の、現在の生活状況、その後の治療等が少しでも判明出来ればお知らせ願いたい等、夛くの御要望が寄せられました。

我々原爆被害者の会としましては、地区内で看護に従事された方々と、報道機関の御協力によって鋭意聴取りを致しました。

生残った我々被爆者も高齢化が一般と進み、今尚、種々の障害によって精神的にも、肉体的にも苦しみ乍ら、その日、その日の生活をしておられる現状でございます。

実際にこの惨死に遭遇した者でないと計り知ることが出来ないのではないかと感じております。

国の責任において被爆者に対する保健、医療及び福祉に亘る綜合的援護対策が講じられております

が、しかしながら被爆者の中には、ひとり暮らしや、寝たきり等の要介護者が増加しつつあります。
今後とも被爆者援護の理解と、援護行政の一層の充実をお願い申し上げ、更に核兵器の廃絶と世界の恒久平和を願うものであります。第一号と同様第二号も教材として市内の小学校、中学校に配布して、原爆の恐しさを生涯教育の資料としていただければ幸に思います。
葛城第二号の発刊にあたり滝口市長様から有難いお言葉を頂戴し、又地域の皆様方から尊い体験を御投稿並びに関係資料のご提供を賜り、衷心より御礼申し上げます。
終りになりましたが編集委員の方々には、日夜編集会議や、資料の収集にご協力いただきさらに報道機関の格別の御協力によってここに葛城二号が完成することが出来ました。
改めて有難く感謝申し上げ発刊の言葉といたします。

被爆体験記「葛城二号」の発刊によせて

庄原市長　滝　口　李　彦

平成十三年十一月、被爆体験記の発行や体験の継承活動、山内地区原爆慰霊法要への協力などの諸活動を目的に山内地区原爆被害者の会を結成され、平成十四年七月には当時の献身的な救護の貴重な活動記録等を収録した被爆体験記「葛城」が発刊され、今年も第二号が発刊されますことは、原爆の悲惨な事態を貴重な記録、資料として後世にまで継承できる、まことに意義深いものと感銘いたします。
昭和二十年八月六日、広島市に投下された原子爆弾は、一瞬にして十数万人の命を奪い去り、生き残った被爆者も様々な後障害により、いまなお肉体的にも精神的にも苦しみ続けております。
原爆投下後、当時の山内西国民学校は、旧広島陸軍病院の庄原分院として指定され、多くの軍関係被爆者が芸備線を経由して山内駅から小学校へ搬送され病棟で治療を受けられました。その際、地域住民の方々は被爆者への回復の願いを込め負傷者の手当・看護に従事されました。看護の甲斐なく犠牲者となられた方々の遺体処理など当時、従事された皆様方には忘れることのできない悲惨な体験と

して残っていることと思います。そして従事者の皆様は二次被爆という大きな代償を負うこととなりました。

その後、「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」をはじめとする被爆者に対する保健、医療及び福祉にわたる総合的な援護対策が講じられているところであります。

しかしながら、今日、被爆者の高齢化が進む中、ひとり暮らしや寝たきり等の要介護者が年々増加するなど被爆者の環境は変化しつつあります。

今後も、被爆者援護の理解を深め、援護行政の一層の充実、さらには核兵器廃絶と世界恒久平和の確立を願うものであります。

この「葛城二号」が、貴重な被爆体験記として後世に引き継がれ、人類平和のための情報資料として益々有効に活用されますことと、同会の更なるご発展を祈念して発刊に寄せてのご挨拶といたします。

被爆証言

広島市　高　柴　トヨ子

記憶が次第に朧げになっています。なるべく思い出したくないという気持ちが強くありました。忘れよう、忘れようとしてきたのです。同じように被爆した同級生のなかには、当時の様子を鮮明に記憶している人もいます。クラス会で当時のことを詳しく話す同窓生もいます。同じ境遇を経験している者どうしで思い出すことはあります。思い出すことは本当に悲しいことだけです。何ともいえない悲しさです。

一九二〇年四月に、召集令状がきました。広島陸軍病院看護生として召集されたのでした。それで、基町にあった広島陸軍病院にいき、その病院の教育隊に所属することになりました。宿舎は兵舎で西町兵舎と呼ばれていました。私たちがこの兵舎で生活するまえには、陸軍の衛生兵の教育が広島陸軍病院で行われていて、衛生兵の宿舎でもありました。私たちは、百二十名の同級生でした。山口、岡山、島根、鳥取、広島の中国全県から参加していました。私は、四月に広島陸軍病院看護教育隊へ召集されました。

入隊したのは十五歳の時でしたが、看護婦としての教育と特攻隊のような兵士としての教育を受け

ていたように思います。四か月の訓練が終了すると、野戦病院のようなところに配属されるのだ、と考えていました。

それでも、軍隊の五か条とかいうものも強く教えられました。「一つ、軍人は…」ということを暗記していました。教育隊でも軍人さんたちと同じで、伍長さん以上の人には敬礼が義務づけられていました。不寝番も経験しました。

八月六日の朝、食事当番だったので、朝食が済んだあと、もうそう竹製の食器を洗い場で洗っていたとき、右方向からの閃光で被災しました。当時の陸軍病院の洗い場施設は、一Mくらいの高さがあるコンクリート製で数か所、水道蛇口が付いていましたが、このコンクリート壁が閃光をさえぎったことで、幸いにも私の下半身は無傷でした。この幸運が後の健康回復に重要な条件をつくりました。しかし、両方の手、顔、背中が熱線の被害を受けました。足に直接の被害がなかったので、爆心地から逃げることができたのです。戸坂へは、太田川の中洲を歩いて行きました。途中、黒い雨が一時降りました。それで、歩いていた数人といっしょに毛布のようなもので雨をしのぎながら、川の中洲で眠りました。朝になって、歩ける者で戸坂小学校にむかいました。戸坂小学校は、陸軍病院の分院が開設されていましたから、戸坂分院にいけば、治療がうけられるだろうというという希望があったのです。戸坂へ、戸坂へ、という気持ちでした。戸坂につくと本当に大勢の被害者が集まっておられました。一万人くらいの被災者数だといわれていました。戸坂小学校を中心にあたりの田や畑には、足

の踏み場もないほど、被爆患者が横たわっていました。トイレに行くのにも、人の上を移動する、という状態でした。あたり一面にという光景でしたので、学校の中にはいることができませんでした。しかたなく、学校付近の芋畑で二晩過ごしました。戸坂小学校に着いて三日目に、元気な者から戸坂駅に行くように言われ、まず、元気な者が庄原に移動する、ということで庄原に移動する者が出発しました。そのあと、なんとか歩ける者を含め、重傷患者が山内に移動することになりました。戸坂小学校から歩いて駅まで移動しました。駅に着くと、四～五両編成の列車の貨車に乗せられました。汽車のなかは臭気も暑さも大変でした。多くの人が乗せられました。ひしめくように貨車の角かどに寄せられていました。何もひいてない、倉庫のような貨車でした。板と鉄の貨車でした。列車の中は汚物もそのまま垂れ流すしかなく、列車内は異様な匂いと蠅とウジが溢れていました。背中が火傷している人の体には、ウジがびっしり並んでいました。私は山内駅に着くと歩いて貨車から降りました。駅からは荷馬車で運ばれました。初めて、自分で歩くことでなく、移動できたので本当に楽だったと覚えています。山内病棟では、食事は山内の婦人会のかたが直接口に食べ物を入れてくれました。上半身がほとんど火傷していましたから、動くこともできない状態でしたし、被爆して数時間が経過したころから、両手が野球のグローブのように腫れて大きくなり、被災した友人が水を求めたとき、両手で水を汲むことができない状態でした。全然手が使えなかったのです。着衣は、縫い目の厚い部分だけわずかに残り、ほとんど裸同然でした。逃げるにも最初は裸足でした。黒い雨を避けるときに使ったものも、どこかで拾った布のようなものでした。

山内の病棟では、たまたま、病室となった教室の入口付近に寝かされたので、幸運にも毎日、医師の治療を受けることができました。私が入れられた教室の廊下をへだてた部屋に医師や看護婦さんがおられました。余りにも患者数が多く、反対に医師や看護婦が少数でしたから、全部の患者が医師から毎日治療を受けることはできなかったのではないかと思います。患者全員を治療する前に、日没になっていったように覚えています。ちょっとの間、眠って目覚めると、となりに寝ていたひとがいなくなるということが続きました。亡くなられたのです。脳障害を起こしてたくさんの叫び声が聞こえていました。軍隊の号令などの声が良く聞かれました。お母さん、というような声は聞きませんでした。

食事は、最初の時期には、なにしろ人数が多いので、日に三回採るということはできなかったのではないかと思います。山内の婦人会の人たちが本当に懸命に対応されていました。水はヤカンの口からそのまま飲ませてもらいました。おかゆもさじで一口づつ食べさせてもらいました。受けた治療は、赤チンのようなものを体に塗ってもらうことが中心でした。地域の婦人会の人たちのお世話になりました。看護婦さんも少なかったので、地域の婦人会の人たちが軍医や看護婦さんの指示で対応してくださったのだと思います。治療を受けるなかで、患部から膿みがでるため、ガーゼのような衣れを体に貼ってもらっていましたが、膿みが固まってくるため、貼ってもらっていた衣れを取り替える時、皮膚も一緒に剥されるような激しい痛みがいつも伴っていました。その度に体中のあちこちから出血していました。この衣れの取り替えが苦痛なので、次第に取り替えをせず、放置した状態になっていったと記憶しています。

時々、股（もも）の部分に本当に痛い注射をしてもらったこともありました。カンフル剤ではなかったかと思いますが、強心剤だとおいます。数回、受けました。

突然に夜、通電され、夜間でも照明機器を使用することが許可されたとのことで、明るい夜を過ごすことができるようになりましたが、今おもえば、あの明るい夜は終戦の十五日のことだったと思います。それまでは、灯火統制で照明機器には黒い布がまかれ、夜はほとんど暗かったのです。

家族が八月の終わりに迎えにきてくれました。

実家は賀茂郡豊栄町玖波です。私は三人姉妹で、みんな広島にいました。中の姉は私とおなじ陸軍病院で勤務していて直爆死で亡くなりました。看護婦でした。八月五日から夜勤勤務でしたから、原爆投下時には勤務中で、どのような状況で亡くなったのかはいまでも不明のままです。長女は牛田にいたので、一晩山のなかで過ごして、次の日に田舎の豊栄にかえって無事でした。実家では私達は生きていないだろうと判断したそうですが、一応、広島市内まで出向いて、捜索してくれました。

広島陸軍病院からは、勤務者の戦死者の戦死名簿が一応、発表され、その中に姉の名前もありましたが、もしかして、という気持ちで長い間、あちこち捜して歩いたそうです。

私が実家に家族と帰ったのは八月の終わりだったと思います。地域のかたからいただいた上着のような衣服を身につけ、長ぐつで鉄道で広島回りで帰りました。

山内病棟では、看護学校の同級生だった泉さんと村上さんが同室でした。頑張ろうという声かけも

しあいました。同じ病室（教室）でとなりどうしで治療を受けていました。

被爆した同級生の殆どは、肺ガンで亡くなりました。被爆直後に呼吸器のなかにはいった小さな砂は灰などによる罹病ではないか、と思っています。

終戦後、昭和二十一年になって、生存者に対して広島陸軍病院から改めて看護婦の再教育を受けることが可能であるとの連絡があり、働くことが必要でもあり、山口県柳井市の国立柳井病院の看護学校に入学することにしたのです。この病院での教育を五年間うけました。この学校を卒業して、中電病院に就職しました。十三年間この病院で働きました。その後この病院の院長さんが学校の先生をすることになり、この院長先生に誘われてその高校の養護教諭として学校で働くことになったのです。

当時を思い起こしてみて、本当に多くの人たちの暖かい援助があり今日があると思っています。被爆直後、早い時期に爆心地を離れることができたこと。そして、基町から避難し戸坂に向かう途中、一緒に移動していた人が、だんだん一人減り、二人減りして、一人になったとき、激しく嘔吐しました。この時、胃の中のものを繰り返し強く嘔吐したことと火傷したことで白血球が増えたことが幸いしたのだと思います。

足に被害がなかったこと、山内に運ばれたこと、山内で暖かい治療をしていただいたこと、食事をいただけたこと、教室の入口に寝かされたことなど、幸運だったと思います。あの時のことを思えば、先日の地震など、なんの不安も感じないような気持ちでした。

戸坂で、山内に運ばれることになって、これで助かるという希望を持つことができました。一番早

く県北に向かう列車に乗りたいと思いましたが、次の列車に乗ることになりました。その理由は、一番列車は比較的元気な被害者を中心に運ばれ、私たちのような重傷患者は二番列車で運ばれることになったのです。最初の汽車は庄原に向かったと聞いています。ですから、山内に運ばれた患者は重傷者が多かったのです。

戸坂小学校で指定された病室にはいりましたが、私たちの病室には、看護生だけが収容されていました。

この病室のなかから、山内病棟への輸送者が決められました。

列車に乗せられた時、これで助かるという気持ちになりました。

列車のなかは、本当に暑かったです。ハエもひどいし、蛆が大変でした。傷口に蛆がびっしりとわき、肌が見えないほどでした。

汽車は貨物列車でした。貨物の周囲に体をよせたり、寝そべったりして、車内はいっぱいの被災者でした。列車のなかでお互いに会話するような、励まし合うというような状況ではありませんでした。ただ、夢遊病者のような感じでした。

また、列車の中は、何とも言えない臭気に満ちていました。人間の体が火傷した匂い、暑さのなかでの汗の匂い、汚物が処理されず臭いは堪えがたいものでした。

車内は重傷者で皆な裸同然で、一瞥だけでは男女は判別できないような状態でした。ただ横たわっているだけでした。

山内駅に着くと、私はかなり大きな馬車に乗せられました。乗せてもらったことは本当に嬉しかった記憶があります。それまで、移動するには、どこに行くにもよたよたしながら自力で歩くいがいにありませんでしたが、山内駅で初めて、乗り物に乗せられた、という気持ちでした。

病棟では、山内の婦人会の人たちが蛆を竹の箸のようなものでとってくれました。

私は、八月六日には、毎年平和公園の慰霊式典に参列しています。五十周年までは、毎年八月六日に陸軍病院跡の慰霊碑のまえに生存している看護隊同窓生があつまって追悼行事をしていました。

山内にはその後まだ一度も訪問していません。今年は皆を誘って山内の追悼慰霊式に参列してみようと思います。

被爆証言

匿名希望

これまで行われていた平和運動に積極的な賛意をもつことはできません。

私たち被爆者は、広島県外からも県内からも特別な視線を投げかけられ続けて来たことを痛感しています。とりわけ、結婚ということでは、次世代への強い影響が避けられないというある意味では当然の判断が世間一般にありました。今でも、世間では、決して消滅した意識ではないと思っています。

原爆被害にあってから、陸軍病院の人から戸坂小学校に避難するように指示されたので被爆後、基町の陸軍病院から歩いて戸坂小学校に移動、逃げました。

戸坂に逃げる途中、私たちの姿を見て、農家の人たちが、トマトやきゅうりなどの野菜を持って近寄って来て、「食べなさい、頑張るんよ、」と励まして下さいました。今とは違って、戸坂までの地域は、農村地帯でしたから、田舎的な人情がまだ厚かったのだと思います。本当に嬉しかったことを覚えています。数年後、広島市内に帰ることができて、野菜をもらった場所を訪ねていったこともありました。お礼が言いたかったからです。

どの位で戸坂小学校に到着したのか定かな記憶はありませんが、到着してみるとあたり一面に被害

者が集まっておられ、学校の周囲は、畑も田も被害者でいっぱいでした。見渡す限りの人でした。ですから、小学校に到着しても、とても、学校の中にはいることはできない状況でした。戸坂は村だったので、戸坂小学校は、教室の仕切りは障子でした。みんな校舎の中に入り切れず外で寝そべったりして休息をとっていました。

それから、二～三日にして、陸軍病院の看護生は一か所に集まりなさいという指示が衛生兵からなされました。そして、戸坂小学校から戸坂駅まで担架や大八車のようなものに乗せられて、運ばれました。大八車は、満載という状況でした。私は重傷だったので、同級生はおそらく助からないと思っていたそうです。

戸坂駅から乗せられた列車は、木製の部分が多かったようでした。当時の汽車は造りがそのようでした。客車でした。

私たちが乗せられた列車が山内に向かったのですが、被害者を乗せた初めての列車でした。次の列車が庄原に向かったのです。

列車にのせられて、どの駅かは分かりませんが、列車が停車した駅でアイスキャンデーを食べさせてもらったことを覚えています。とても甘かった記憶があります。三次の駅だったのか、とも思っています。全部食べられたのかどうかは覚えていません。運ばれたのは山内でした。途中、列車が停車した駅の数は覚えていません。山内駅に到着したときには、自力で歩くことはできなかったので、駅から学校までは、馬車に乗せられたと記憶しています。

山内では、本当にお世話になりました。毎日、近所の婦人が本当にいろいろなお世話をしていただきました。毎日、来てもらいました。裸同然で収容されましたが、いつのまにかきちんとした衣服をいただき、着せて頂いていました。髪も全部、抜けていました。食べるものもトマトとか、いただきました。本当に親切でした。当時は、戸坂も現在とは違って、田舎でしたから、市内から逃げて行く途中、農家の人が出てきて、きゅうりやトマトを手渡して、頑張りなさいよ、と励ましてくれました。今でも、親切にしていただいたのは、このあたりだったかな、とおぼろげながら分かるのです。ありがたかったです。

山内で収容された人は、みんな本当に重傷だったと思います。毎日、亡くなっていくひとがありました。収容され、治療を受けているときも、アメリカ軍がどこかから上陸してくると予想されていることが、病室のなかで話されていました。

自分で歩けるようになったのは、八月下旬でした。毎日、私を視てくれたおばさんは、毎日、看護に来て下さいました。とにかく、家族のところに帰りたくてたまりませんでした。実家は山口県内ですから、家族が見舞いにきてくれて、私の様子を見て一応は安心して帰っていったのです。なんとか自力で歩けるようになっていても連れて帰れる状況ではなかったからです。山内のおばさんからは、着るものやぞうりまでいただきました。本当に親切にして頂きました。

私は、志願兵でした。自分で志願して、広島の陸軍病院に入ったのです。五月に入隊しました。当時、十六歳でしたから、そのような気持ちが普通でした。

山内では、毎日、おばさんが看護してくれて、毎日、頭の血を丁寧にふき取ってもらったことを覚えています。「かわいそういね、こんなに、小さいのにね…」と話しかけてもらっていました。毎日来てもらっていたのに、日によって多少遅くなって病室にこられた時など、わがままにも、もっと早く来てほしい、と抗議めいた言葉も口から出てしまい今想えば、それでもやさしくお世話いただいたおばさんには申し訳ない気持ちでいっぱいです。

私は、外が見えるところに寝かされました。一階の病室で、そこから田んぼの稲もみえました。その後、最初に慰霊碑が建てられた場所がよく見えていました。

数年して、山内の慰霊式に参列したとき、病室になった教室に行き、ここで治療を受けたんだ、と思い出しながら、感慨深いものがありました。病室からはるか遠くに汽車が通るのが見えました。毎日辛く、悲しかったのです。幼いなりに、十歳代で一生懸命になっていたのです。それが、一瞬にして、光っただけで、あたり一面が地獄のようなものになったのですから、とにかく悲しかったです。ああ、これが戦争なのか、と心でおもいました。爆心地から七〇〇メートルの地点です。

皆さんは、「ピカ・ドン」と表現されますが、私は、「ピカ！」という光りを感じましたが、直後、「シュー！」という音を聞きました。「ドン！」という音は、私は聞きませんでした。

看護生が何人、山内で治療を受けたのかはわかりません。陸軍関係の人だけだったと思います。一般の人はいなかったとおもいます。次第に元気になって、看護生同志で励まし合って治療を受けていました。

みんな重傷でした。ある人は、背中全体が焼けて、膿がでるし、ハエが集まり、蛆も湧きます。薄い布を貼りつけてもらって、それを取り替えてもらっていましたが、膿で布も固まり、取り替えようとしたら皮膚も一緒にはげるようなことになり、苦痛でどうしようもない状況でした。

また、もう一人のひとは、左側の耳の後ろがひどく痛いといって苦しんでいました。初めは原因がよくわからず、出てくる膿の治療だけしていました。次第に膿が出なくなってきて、柔らかい皮膚が再生してきたとき、首の中から木片が少しのぞいてきたのです。それで、首の周辺に激痛がはしっていた原因がわかって、医師が十センチ以上だったと思いますが首の後ろから木片を抜き取ったのです。みんなが激励しました。

また、頭の一部が削りとられたようになっていた看護生もいました。なんともいえない様子でした。ここからも出血して、毎日拭いてもらっていましたが、陥没したようなところに蛆がいっぱいついていて、痛い、痛いと泣いていました。蛆が頭のなかに入って食いちぎっていたのです。びっしり蛆がついていました。結局、この方は退院され帰郷されましたが、数年後に亡くなりました。

高柴さんも、本当にひどい状況でした。よく、回復されたと思います。病室で少し余裕が出てくると、痛い、痛いといっている少女のところには行って励ましました。

私も重傷でしたが、被爆後、本当によく吐きました。おなかにある全てのものを吐き出しました。何回も吐き出しました。いまでも慢性気管支炎になっています。

病室の中は、怖かったです。それは、夜でも昼でも、兵隊さんが突然、叫ぶのです。「天皇陛下万歳！」

とか、号令のような言葉が発せられていました。まだ、敗戦を知らないのですし、障害が脳におよんで、精神的にも障害者でした。誰も、戦争に負けるなどとは夢にも思っていなかったのですから、絶対に勝つと信じていました。そのように教育され洗脳されていたのですから。特に陸軍ですから。

原爆投下後、山口県光市からすぐ私の安否確認のため、父親が陸軍病院跡地を訪ね、そこで、戸坂小学校の陸軍病院分院に移動していることを聞き、戸坂で調査し、山内小学校で治療中との情報を得て、山内病院に来てくれたのです。

私は、早く実家に帰りたくてたまらなかったのです。毎日、遠くを通る汽車をみて、泣いていました。靄がかかったような夜は、本当に悲しくて、家に帰りたかったのです。

長く風呂にもはいることが出来ず、山口に帰ったときには、家族も地域の人も、おばけが帰ってきた、と話していました。病棟から帰る時には、山内小学校のすぐ裏の家に看護のお礼を言って帰りました。

山内で治療を受けて、現在も元気な二期生は、五人だとおもいます。一期生は当時、もう看護の業務に就いておられたので、殆ど亡くなっていると思います。

私は、平和公園には行きたいとはおもいません。
人間が本当にぼろきれのようになったのですから。

私は、山内で本当によくしてもらいました。毎年、山内の慰霊式には参列しています。
これが、戦争というものなのか。戦争というものの本当の姿を見ました。本当に深い悲しみがあの時から、ずっと続いています。
亡くなった人はもちろん、生き残った被害者もその後の人生で苦しみ続けています。思い出したくないと想いながら、山内の皆さんには心から感謝し、繰り返されてはならないと念じています。

被爆体験証言

岡山県倉敷市　内田栄一

復旧した旧国鉄芸備線で被爆者を輸送

私は、広島第一陸軍病院で勤務していました。

私は、たまたま、兵舎から西練兵場のほうを何気なく見ていた時、原子爆弾がさく裂したのです。丁度、八月五日は夜遅く本隊である陸軍病院に帰った日でした。午前三時ころ病院に帰ったのです。八月になって、陸軍病院戸坂国民学校分院で防空壕を掘る作業に従事していました。この作業がようやく終わり、陸軍病院に帰ってきた次の朝のことだったのです。深夜に本隊に帰還したため、上官から休養許可が出て、通常午前六時起床のところ、午前七時過ぎにはまだ寝ていました。すると、空襲警報が発令され、それに起こされて、病院内の防空壕に避難したのです。そして、警報が解除になったので、そのまま、午前の勤務に就こうかとおもっていましたが、寝床の片付けが残っていたので、寝室にもどり寝台の毛布をたたむため、毛布を手に持っていたのです。他の者は朝食に出かけていましたが私達は整頓をしていたのです。

そのとき、丁度、ガソリンに点火するとその瞬間にでるような、「ポッ！」という音を聞き、その直

後に「ピカッ！」とマグネシウムのカメラフラッシュ光線のような光りを感じて、一～二秒後に「ドカン！」という爆発音を聞きました。太陽が爆発したのではないか、と瞬間、思いました。

光りは兵舎のなかにまで侵入しましたが、丁度、私は毛布をたたむために、持ち上げていたので、光りが直接、体にあたらず、光りは毛布にそって走ったのです。私の周囲で立っていた人は、その光りでひどい火傷を負いました。私は、無傷でした。

そのため、翌朝、戸坂分院まで徒歩でたどり着いたのは、私が一番早かったのです。早速、分院の責任者であった軍曹に被災状況を報告しました。軍曹に、「どこに爆弾が落ちたのか？」と聞かれましたが、爆弾がどこに落ちたのかわからなかったので、「わかりません！」、と答えると、「ばか者！」と叱責され強く頬を殴られました。

時間の経過とともに、広島市内からおびただしい被災者が戸坂分院に押しかけましたので、わたしは分院の軍の一員として救護活動に加わりました。分院には、五～六人の看護婦さんも配置されていましたが、戸坂分院の周辺には一万人を越える被害者が到着しましたので、対応することが極めて困難な状況でした。また、多くの被害者が助かりたい、早く手当てをしてほしい、と競って看護婦さんに求め、看護婦さんに多くの被害者が抱きつくような状況でしたから、院内では、看護婦さんを一人では歩かせられない事態でした。常に、兵員が看護婦の「警護」にあたっていたのです。

しばらくして、陸軍病院の看護学校の生徒が戸坂に向かっているという情報が入り、軍曹一名が先導して、看護生を迎えに行きました。迎えに行く途中、戸坂方面に向かう被害者を押し分けて前に進

むような状況でした。工兵橋の近くでその看護生に合い、背負って運びました。背中の看護生が「兵隊さんの背中は冷たいね…。気持ちが良い…」と話しました。

戸坂分院の周辺には本当に多くの被害者が到着しましたので、対応不可能となり、比較的健丈な軍関係の者を鉄路で農村地域に輸送することになったのです。

この計画は、軍の指示でしたから、鉄路が復旧すると、最優先して軍関係の被害者を輸送する作業が開始されました。

私は、広島発の芸備線復旧一番列車で被爆者を県北に輸送する任務に従事させられました。客車車両には、座席に三人づつ腰かけさせて運びました。通路にもデッキにもできるだけ乗せることにしました。

列車には、軍曹一人と上等兵が二名、二等兵が四～五名乗って被害者の輸送を担当しました。出発駅は戸坂駅でした。

被爆者輸送列車は、繰り返し運行され、遠くは鳥取県内にも輸送しました。

比較的元気だと診れる患者から優先して運びました。歩ける者はついてこい、と指揮官が指示し、担架ではこんだ人もいました。一人ひとり名前も聞いて、わかったら、布切れで首に名前を書いて、猫の首輪のようにかけたのです。患者はほとんど裸同然でした裸同然の状況だったのは、女性のほうが多かったようでした。

列車のなかは夏の暑さによる汗と火傷の患部から出る臭気、さらに、汚物の悪臭も混じって、気の

遠くなるような、なんとも言えない状況でした。走行中ではまだしも、停車中は、どうしようもなかったのです。

行き先は、庄原でした。原爆によって市内中心部の鉄路は破壊され、八月九日にようやく復旧したのです。

庄原に到着したのは、すでに夕方になっていました。駅は薄暗く、すでに点灯していた構内の電灯には黒い覆いがかけられていました。

庄原駅では、警防団や在郷軍人会、婦人会の人たち、また、男子の高学年の国民学校生徒が駅のホームに並んで待機していました。竹製の担架を用意されていました。「むしろ」をひろげた担架でした。駅の前に少しの町並みがありました。駅で被害者全員を降ろして、学校に運びました。患者の受け取りは、在郷軍人会であったと思います。被害者を引き渡すとき、その悲惨な状態を見られた婦人会の人たちの驚きの表情をいまでも覚えています。ほとんど裸同然で、顔もふくれ、一方の目しか開いていない患者がほとんどで、性別も判別しにくい火傷と血まみれで人間とは思えない状況でしたから、駅のホームで被害者を初めて見た人たちは、思わず後すざりされていました。声もでなかったという様子でした。駅からは、在郷軍人会の人たちが先導され、歩けるものは歩きましたが、ほとんどの被害者は担架で運ばれました。町並みを運ぶとき、町の人たちは家の影からこっそり観ていました。恐ろしいものを観るような気配でした。

学校まで全員を運んで、学校で正式な引き渡しを行いました。私たちは、引き渡しをすませたあと、学校の教員室で「銀飯」と「漬物」を食べさせていただきました。お風呂も使わせていただきました。

学校で一泊させていただき、翌朝の一番列車で戸坂分院に帰還しました。

被爆証言

広島市安佐北区　川　地　トシエ

私は、一九四五年八月六日ころは、旧芸備線志和口駅に近い産業組合（現在の農協）に勤務していました。

広島に原爆が投下されてから、原爆の被害者が汽車で運ばれてくるから、その被害者に駅でお茶などの接待というか、救護をしました。

当時は湯飲みもなかったので、しゃくでお茶を汲んで一人一人に飲ませました。軍隊からの指示だったのだと思いますが、志和口駅長が志和口の堀越婦人会に列車で運ばれてくる被害者にお茶をだす救援作業を要請しました。駅長からの要請を受けた婦人会長さんが、駅の近くにあった農協で働いていた私たちに応援を求めてこられたのです。当時、産業組合で働いていた四～五人の女性職員がこの作業を応援したのです。当時の駅は、駅長さんだけが男性で、あとの職員は普通、女性でした。

当時、志和口駅は機関車に石炭と水を補給する駅だったので、他の駅よりも停車時間が長かったのです。この停車時間内で、列車のなかの被害者にお茶を飲ませて歩きました。列車の中には被害者がいっぱいだったので、とても全員には飲ませることはできませんでした。

列車の中は、まさに蒸し風呂のような状況でした。志和口駅までに死亡した被害者は志和口駅で降ろし、近くの火葬場で荼毘に付されたのです。この作業には、地域の消防団の人たちが動員されていました。当時は、志和口周辺は、火葬で漂う臭気があたりに充満していました。

被害者が満載された列車が到着するごとに、死亡された被害者が列車からおろされ、一日に何人死亡したのかわからなくなるほどの死亡者でした。

被害者を乗せた列車は、日には何回も到着しました。その度に、お茶の救援作業を実行した。一つの列車で四十～五十人くらいの被害者にお茶を飲ませてあげました。

停車時間は短いし、あまり熱いお茶なら飲みにくいということで、水を継ぎ足して冷やしたりしました。お茶はトタンでできたバケツにいれて配りました。とにかく、忙しくて一人でも多くの人にお茶をあげようと必死でした。

列車は何本も北へ向かいましたが、次の列車用のお茶をつくる時間がなかったように覚えています。

列車は、五～七両編成で、前部分が客車で後部に貨物車と車掌車両が連結されていました。客車部分には被害者が満載されていましたし、貨物部分にも被害者が乗せられていました。比較的長い列車でした。駅のホームから列車の中を見ると、反対側の窓が見えないほど被害者がつめこまれて運ばれていました。当時は、通常でも汽車は満載の乗車が普通でしたが、原爆被害者を乗せた列車も、すべての車両がいっぱいの人でした。

乗っている人は、男女の区別がつかないほど、火傷で顔も体も変わっていました。顔もふくれている人が多く、目が一つしかないような状況でした。

夏でもあり、列車が停車している時間が短いので、素足でホームを走りながらお茶を配っていると、患者の体に触れることもたびたびで、列車が通過したあとには、自分の顔や手足が濡れてしまっていました。

列車の責任者のような兵隊さんが、「山内まで頑張れ！もう少しだから頑張れ！」と何回も被害者を激励されていたことを良く覚えています。

どの列車にもおなじように多くの被害者が乗せられていました。お茶を飲むのは、比較的元気な人でした。乗っている被害者は、くちびるがだらっと垂れ下がっているひと、背中いっぱいに蛆が湧いている人など、大変な状況でした。どの人も、良く観ないと性別の識別ができない状況でした。まともに服を着ているひとは無かったと思います。被害者を乗せた初めての列車が駅ホームに入り、乗っているひとを観た時、汽車のなかは、まさにおばけだらけのような感じでした。

汽車で運ばれる被害者の援護作業をさせられてからは、夜、何度も汽車のなかの光景が夢に出てきて悩んだことを覚えています。

たいていの列車は客車が四両くらいで、貨車が後ろについていて車掌さんが乗った車両もあったと思います。

また、中には、郵便車が連結していた列車もありました。貨物だけの列車は殆ど夜に運行され、昼間の列車は被爆者を輸送するために運行されていたのだと思います。列車はたいてい、六両から七両だったと思います。山内という所は昔、ひよこを育て県内各地に出荷していた時代があり、志和口地方も山内のひよこの消費地であったので、山内という地名を聞いた記憶は鮮明です。列車が駅に到着すると、私たちはできるだけ多くの被害者にお茶を提供しようと必死でしたが、列車の責任者が優先してお茶を飲ませたい被害者を指名するようなこともありました。どうして、同じような被害者なのに、優先する人を選別するのか、と不思議でしたが、地位の高い軍人さんなのか、と思いました。とにかく、列車のなかはあふれんばかりの被害者でした。車両の中も、デッキも、いっぱいでした。後部の貨物車両は、一方の入口が大きく開かれていました。締め切ると夏の暑さで耐えられないことになるからだと思いました。駅のホーム側の扉が開けられていました。この作業に従事したのは、三日間程度だったとおもいます。まだ、終戦前だったので、列車のホーム反対側は木枠の窓が閉められていました。当時は、汽車に乗っても、自由に外の景色を観ることは出来なかったのです。車内はとても暑かったと思います。

出来るだけ多くの人にお茶を飲ませたくて、ホームを走り回りながら被害者に近づいて竹製のちいさな柄杓で飲ませていると、被害者の口や首、体の焼けただれ、垂れ下がった皮膚が私の手や足にべったり付着しましたが、それも、列車が駅を出た後の後始末の時に気づくような状況でした。

私の母親は、被害者の病気がうつるからと作業にでることに反対しました。しかし、作業も数日間で終了しました。母は、娘の縁談に差し障りがあるといけないから、駅での援護作業に従事したことをあまり周囲に話さないように口止めしました。姉妹が多かったので母は、早く嫁に出したかったのでしょう。

私が生まれた地域は、現在の白木町ですが、この地域は殆どの家庭で原爆被害を受けてたいていの家庭では、家族の誰かが原爆で亡くなったので、多くは遺体のない葬式が頻繁に行われました。広島まで比較的近いので、家族の誰かが広島市内で働いていたのです。

丁度、原爆が落とされた時刻が会社などの出勤時だったので、みんな、爆心地付近で亡くなったのだと思います。

遺体のない葬式は本当に悲しい葬式でした。

最近まで、不明の家族がどこかに生きてはいないか、と広島市内を歩いて見ることを続けている人もいました。

戦争で兵隊にとられ、戦地で兵士として戦死したということなら残念でしかたないけれども、納得しようと気持ちを整理することになりますが、あの人数で、あのような体になり、人間のようでもあり、獣のようでもあり、肉のかたまりに目とおもえるものが、ある人はひとつだけ、ある人は、二つついていて、それも、頭髪もなく、顔かたちがわからないような血まみれの大集団…。これが戦争であり、原爆というものであるのです。思い出したくないのに、思い出し、何とも言えない悲しみに体が震えます。

むごい、このことだけです。
私も、七十歳を越え、これまで二つのガンに侵され、闘病、手術の老後です。
二度と起こってはならないことです。

当時の戸坂国民学校

―戸坂村史より―

広島第一陸軍病院戸坂分院

昭和十九年（一九四四）に入ると、六月以降、アメリカ空軍B二九による本土空襲が開始され、広島にも十一月六日に初めて姿を現している「広島県史」。近代2　二十年には、広島市の警戒警報も日常化し、空襲開始とともに広島市も建物疎開や人員疎開を本格的に実施して防空都市化を図った同書。戸坂村でも疎開により世帯数が増加し、二六三戸（昭和十四年）から三〇七戸、三七七世帯（昭和二十となり、軍需物資をはじめとする疎開物資も数多く持込まれた。

戸坂村は広島郊外であったため、各家庭に防空壕を掘ったほかは特に防空対策はなく、むしろ広島市被災時の救護計画にとって大切な村であった。戸坂国民学校には広島第一陸軍病院戸坂分院（第一救護所）が設置され、空襲時には、市内本院や分院及び各部隊の戦傷兵（者）はまず戸坂分院に収容して救急処置を行い、逐次可部・亀山・大林などの第一予備病院へ輸送する計画であった「広島原爆戦災誌」第一巻。この防空救護計画に沿い、米・麦・缶詰類から粉末鶏卵・クラフトチーズなどの食糧や炊事具・薪炭などが戸坂村の民家に分散疎開されていた同書。また、戸坂駅裏山には本土決戦に備え野戦病院的施設の試作として五棟の堀立小屋式応急病棟が作られていた。これらは「原子爆弾被

爆負傷者救護計画」として活用されることになる同前。

原爆投下

昭和二十年（一九四五）八月六日早朝六時、戸坂村は国民義勇隊の編成と演習を実施していた。村内の各集落から一五人ずつ、総勢約一〇〇名を前衛・本隊・大行李・牛車・後衛に分け、来るべき本土要撃作戦に備えて、竹槍・飯盒、炊事道具、救護道具などを携帯し、忠魂碑（旧戸坂出張所付近、戦後撤去）から村中央の橋まで一時間ほど行進をした。その後、村長講評があり、釜が小さく役に立たないことなどが注意された当時義勇隊隊長森分照夫間取り、「広島原爆戦災誌」第二巻。

訓練のために広島へ行く予定をずらした人も多く、義勇隊のため白島へ釜を取りに行った人（数甲三宅サダイチ、土井ノボル）と運命を分けた。八時十五分「北から飛行機が三機白い尾を引いて頭の上近くまで来」たあと、市内へと向い、「白銀光というかピカッと光って、ブルッと身を絞めるような震動と、ドンと陰気な音がした。その瞬間、絵にも口にも表現しがたい毒々しい雑多の色をつつんだ古綿をかぶったようなキノコ雲がのぼった同書という。

爆風のため、各集落の家は、襖がこわれ、ガラスが割れ、天井が吹上った。市内に近い狐爪木、千足が被害の程度は比較的大きかった。しかし、爆心地をへだてること約六キロの地であり、火災などは起きなかった。

被災者の惨状と数護

十時ごろから被爆した人々が、中山村からあるいは牛田町・天水方面から、野戦病院のある戸坂国民学校へとひきもきらず流れ込んだ。

当時の状況を戸坂分院看護婦川本マス子は次のように記している同氏「原爆投下後の戸坂分院」「戸坂原爆の記録」。

ひどいやけどを負った人々が次から次へとやって来ました。

頭の髪はちぢれ、皮膚はたれさがり、人間の姿とは思えないような、なんともむごい姿でした。ぞろぞろと、あとをたたないこの人々を迎える私たちの気持ちは、なんといったらいいのでしょう。言葉にならない恐怖でした。

人々は運動場に立って、「水を下さい。水を下さい。」と口々に泣き叫び、まるで地獄の絵そのままです。

私たちは、衛生兵の言うまま、テントをはり、机を運び出して、さっそく手当てにあたりました。手当てといっても十分でなく、気休め程度のものでしかないのですが、それでも私たちは夢中で続けました。

しかし、人々はどんどんやって来て、運動場はもう歩く所もないほどにふくれあがってゆくばかりです。叫び声、うめき声、そのなかで一人、二人、そして次々とその場に倒れてゆくのです。夕方になる頃には、その人々の死体は山となって近くの裏山で村の人々の手をかりての死体の処理。戸坂空

は黒い煙に包まれて、その夜をむかえたのです。そんな毎日が続きました。

戸坂分院の看護婦たちは、「言葉にならない恐怖」におびえながらも、次々とやって来る被災者に夢中で手当てを続けていた。

軍医も同様であった。戸坂村へ駆つけた軍医の肥田舜太郎中尉は、着くなり、「道路といわず、校庭といわず、みる限り足の踏み場もない負傷者の群れ」と「入口に山と重なっている」多くの被災者に腰を抜かしたという。彼が戸坂分院に入ったとき、村人の様子は次のようであった同氏「原子雲の下で」同書。

「どえらいことになりよって、中尉さん、何とかしてつかぁさい。」

村長の指さす田のあぜ道に村の人たちがあちらに一列、こちらに一ならびと、まるで、電線にとまる雀の様に腕をこまねいて立ちつくしていた。村中の家という家に血だらけの負傷者がぞろぞろと上りこんで座敷にたおれ伏し、恐ろしさに逃げ出した家人が途方にくれて立っているというのである。

恐怖と混乱の中、軍医の指示ですぐに半鐘が鳴らされ、村人が集められた。そして、国防婦人会の婦人たちは軍の保有米を使い、大きな釜で炊出しにかかり、手の空いた婦人たちは看護婦・衛生兵とともに村の家々から集めた食用の胡麻油をボロ切れにひたして、片端から負傷者の火傷に塗った。死体処理のために臨時の焼場がつくられ、戸坂村警防団の男たちが、青竹の担架で死体を運び荼毘に付した。余りに多数の死者で、周囲の竹薮は裸になり木は燃やされ、家々の藁はすべて焼き尽されたといわれる。

戸坂分院の負傷者は、（イ）太田川沿いの県道筋から約六〇〇〇人、（ロ）東練兵場及び尾長・矢賀方面から中山峠を越えて来た者約三五〇〇人、（ハ）大芝・長束方面から渡舟で川をわたり戸坂へ到着した者約一五〇〇人、（ニ）山口県柳井から来た陸軍船舶工兵隊の機動舟艇（五〇人乗）数隻の反復輸送で太田川から戸坂へ陸揚げされた者約二〇〇〇人など、計約一万三〇〇〇人に及んだとされている「広島原爆戦災誌」第一巻。このうち、特に八日以降多数となったが、各地へ汽車で輸送した約六五〇〇人と処置後退三散した約二〇〇〇を除く約四五〇〇人を戸坂分院に固定収容し、このうち死亡者は二一％に当たる約一三〇〇人にも達した。

民家の介護

「学校に収容し切れない被爆した軍人たちは各家に三人くらい、多い家で八人ほど割当てられ、縁故者やその被爆者であふれる各家はそれにも増してごった返した。食糧・医療品とも不足する中、食事の世話、衣服替えから治療まで、各家でできうるかぎり補った。水の代わりに井戸で冷やした重湯を与え、油のかわりにじゃが芋や胡瓜の汁を塗った。昼間は蠅が来ないよう蚊帳をつり、夜は小さなろうそくで看護した」友田照美「原爆体験記」元軍人の座談会「戸坂とわたし」「戸坂原爆の記録」。亡くなった人も多いが、命の恩人として、介護した村人に深く感謝している人も少なくない。同時に村人の心の中では、介護した被災者の消息が、今もなお気にかかり続けている。

戸坂分院で救護に当たった陸軍病院関係の職員は、軍医一八人、薬剤将校三人、主計将校五人、衛

生将校六人、下士官兵一三〇人余り、看護婦八〇人余り、軍属一〇人の計二五〇人余りで、このうち二割は負傷の将兵、看護婦であった。「全員が食わず眠らず」、屋根が吹きとんだ校舎での露天の救護は、蝋燭の灯を頼りに夜を徹して行われていた同書。

以上のように、「村を挙げての野戦病院」と化した戸坂村は、混乱と絶望、そして極度の疲労の中で八月十五日の敗戦を迎えた。

思い出

水越町　森　田　トシエ

私は原子爆弾が投下された時には、山内駅に勤務していました。戦時中は駅員のほとんどは女性でした。前日、駅長さんから、被爆された兵隊さんたちが、明日の夕方列車でこられるから、優しく迎えてあげて下さいと言われておりました。

八月九日、午後三時ころ、多くの被爆者を乗せた列車が着きました。列車には兵隊さんや、看護婦さんたち、ホームには担架や戸板などを持って出迎えの人で、パニック状態でした。列車の窓からは、苦しい、水をくれ、といわれる兵隊さんたち、私は、ホームに降りられた人をタオルとウチワで汗をふいたり、扇いだりしているうちに、列車は庄原方面へ動き始めました。早く元気になってくださいと、心から祈りながら、列車を見送りました。

駅前の広場では、歩けない人は、担架や戸板、リヤカーで運ばれました。沿道は出迎えの人と、患者さんでいっぱいでした。上着やズボンはボロボロに焼け下がり、体の出ているところは黒紫に焼けただれ、いたましい姿でした。家族もおられるだろうにと思うと涙がとまりませんでした。トボトボと歩いて行かれる姿を見ながら、なんとひどい爆弾が落とされたものだと思いました。

次の日から、地域のものが交代で食事の世話、洗濯、包帯の取り替えなど、一生懸命看護にあたり

ました。私は勤務があるので、二日の看病でしたが、いつも患者の方から、ありがとうございますの言葉をいただきました。本当にみんなが、優しい救護の手を差しのべたと思います。

それから一か月の間、毎日のように、焼き場から煙が上がっていました。駅からそれを見て、また今日もかと思いながら手を合わせていました。

こんなおそろしい原子爆弾、二度と戦争のない平和な世界をつくることが日本の使命であると思います。

葛城によせて

山内町　片　山　ハルエ

「思い出話をするようになればもはや老人」と云うのは中年者達の抵抗の弁、本当に老けてしまえば、思い出話しは遠慮せずにドンドンしたほうがよいと、いつか或る新聞で読んだことがありますが、あの悲惨な原爆も段々と薄れていく今日です。

葛城編集部より原爆体験記事をと依頼されましたが、私の体験は、体験と云えるかどうか、皆様にくらべるとお恥ずかしい限りです。

昭和二十年八月六日の朝、当時国鉄の車掌をしていた妹は原爆投下直後に広島入りして、夜家に帰り広島にすごい爆弾が落ちて広島は全滅戸坂まで歩いて汽車に乗ったと言っておりました。それがあの恐ろしい原子爆弾だったことは後になって知りました。

日本赤十字社岡山支部救護看護婦養成部（現岡山赤十字看護専門学校）を三月に卒業した私は、家で待機、召集令状のくるのを一日千秋の思いで待っておりました。そんな私に、福田悟さんが「学校が陸軍病院になるそうなから、あんたにも手伝いの話があるかもしれないよ」と話された。私は「そうですか、でも私は日赤に籍があり、いつ召集がくるかもしれないから多分ないかも知れませんね」と話したことを覚えております。それから間もなく山内西国民学校が広島陸軍病院庄原分院山内病棟

となり被爆者の方がぞくぞくと運ばれ父や当時まだ国民学校高等科一年生の妹達まで搬送のお手伝いをしたと言っておりました。私には何の話しもない。勝手に動くことも出来ないしどうしたものかなと思っている矢先に長島琢夫先生より婦人会として一日だけでも手伝って欲しいとお話しがあり二・三日でしたらとお手伝いを引き受けました。

翌日病院へ行きそこで見たものは地獄絵そのもの全身焼け爛れ目も口も開けられないような状態でうーんうーんと唸ったり口の中で何かブツブツ言ったり、暴れたりしている人、私が今まで実習に行っていた岡山赤十字病院や岡山陸軍病院では一度も見たことのない光景でした。仕事は残念ながら配属になった部署は炊事部で、もっぱら食器洗い、食事場内外の清掃でしたが、時々病室に行って看護婦さんの尻にくっついて歩き蛆のうごめく傷口を後ろの方から見るだけで、手をだすことが恐ろしくて只呆然と見ているのみでした。

毎日のように数柱の英霊が家の横を通って薬師寺へ祀られて行きました。

「人間には定められた運命『定命』があり、生まれたときからすべてきまっている」と、瀬戸内寂聴さんの御法話で聞いたことがありますが、これが只運命だといって片ずけられてよいものでしょうか。あまりにもむごく悲しく噴くさえおぼえます。核の恐ろしさを今更のように確認し核兵器廃絶を叫びつづけて五十七年どうしてこの世から核がなくならないのでしょうか。

多くの犠牲者のご冥福と世界平和を祈りつつ。

忘れられない思い出

水越町　藤川　ミツノ

私は直接被爆にはあっていませんので、良くわかりませんが其の年の八月六日朝早くより姑と二人止め草と云って這って手で草をとる田仕事に一生懸命でした。主人は当時陸上小運搬の仕事で馬車を使っていましたので召集は来なくてもこれも御国の為だと云って当時山ノ内の河面さんと金藤さんと主人の三人だったと思います。

田の草の最中に突然きいた事のないドカンと云う大きな音におどろき二人で今の音は何だろうか、近くにアメリカのばくだんでも落ちたのだろうかと暫く手を休めて畦に腰をおろし休みました。

其の後は何の事も無いのでおひるに帰りラジオを聞いて広島に大きなばくだんが落され広島市は全滅になり多くの死者が出て焼野原になり日本は負けたのだと言うニュース此れ以上続ける事は国民を皆殺しにするからと天皇みずから降伏されたのだと話が広がり敗戦になったのだと云うことを知りました。日本は強い、決して負けるなんか無いと信じ切っていましたので、くやしくてくやしくて涙にくれました。

原爆にはあっていませんが、この戦争で肉親を二人失いました。たくさんの兵隊さんが落とされた爆弾のために身も心もよれよれになり山内駅に着かれ若い元気な人は背負たり戸板にのせたり三台の

馬車で衣服体全体がぼろぼろ、体の皮はたれ下り、どこをどうして車にのせようかと、痛い痛いとさけばれるのを無理やり車にのせて学校に着き藤高先生と看護婦さんに渡すのが精一杯だったと話していました。きずついてぼろぼろになられた兵隊さんを見てこれが此の世の生地獄だと言ってぽろぽろと男泣きしていました。

三日四日後婦人会が集り少しでもお手伝いが出来ればと患者さんの介護に行く事になり家にある新しい物ではないけど座布団、野さい等持ちより持って行きました。患者を一目見ただけでお国の為とは言えこんなむごたらしい姿になられてと暫く涙が止りませんでした。お茶を水をとさけんでおられましたけど水をやったら死んでしまうからと云われどうしてあげる事も出来ませんでした。ぼろぼろの体にはうじ虫がわきあの光景を見ない者には想像も出来ない程でした。割ばしでとってあげたのをおぼえています。食事を少しづつ口に近ずけても食べられませんでした。包帯、衣類等のせんたくも川に持って行き石をよせて其の上で足で強くふみつけて洗ったものです。石けんがあるでもなし毎日毎日一人二人と死んでゆかれました。いとおしくて涙が止りませんでした。

唯々亡くなられた方々の御めい福を祈るのみです。

毎年の慰霊祭にはひ孫二人がおばあちゃんの分まで拝んで来るからと云ってお参りしてくれます。これから先の世の中、こんな悲惨な事は二度とない様に世界中が平和である事を切にお祈り致しております。

—五十八年前の看病を通して—

水越町　池　田　トキワ

八月六日、広島に原子爆弾が投下され、当時の山内西国民学校が陸軍病院の分院になり、三〇〇人に近い兵隊さんが運ばれてきました。

私は当時の国防婦人会の一員として常会の皆さんと被爆された兵隊さんの看護に当たったものですが、今、思い浮かべたら、あの夏は大変暑くて、負傷された方の、痛みは激しかったと思います。

運ばれた人の、うめき声、水を求める人、この世の生き地獄さながらの様相でした。目はつぶれ、耳は垂れ下がり、ウジがわき、むせ返るような室内の空気と悪臭の中で、どこから手を貸してあげようかとうろたえるばかりでした。これという薬はありませんでしたが、一生懸命看病にあたりました。少しでも多くの方の命が助かることを願いながら、頑張りました。しかし、毎日のように、なくなられるのが、悲しくてたまりませんでした。あの時のことは、いつまでも忘れることができません。

思いはいろいろありますが、心の底から訴えたい—あれから五十八年が経過しますが、いまだに核兵器はなくなりません。広島・長崎を中心にした核兵器廃絶の運動が大きく世界に広がり平和で住みよい世界になることを、祈っています。亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

忘れ得ない五十八年前の夏

庄原市　小　川　ひふみ

長い年月が過ぎましたが、本当に多くの被害者が、うめき、苦しんでおられた光景は今でも鮮明で記憶から消し去ることはできません。

私たちは、当時、担任の先生の指示で山内駅まで、「被害をうけた兵隊さん」を迎えにいきました。

学校に着いてからは、多くの被害者の手当てをされていた看護婦さんからさまざまな雑用の手助けを求められ、看護婦さんの指示を受けることになって救護にまわりました。教室には組み内の婦人会の方々も集まって救護に当たっておられました。どうして、同時にこのように多くの人が火傷を負われたのか不思議でした。婦人会の人たちが、私たちに、一緒に介護してあげましょうね、と言われ、私もふくめ、みんなで婦人会の人たちの手伝いを一生懸命しました。

ほとんどの被害者が、「痛い…」「暑い…」と苦しまれ、どうしてこのようなむごいめに合わなくてはならなかったのかと思い気の毒でたまりませんでした。

当時は、「ピカドンにやられた…！」と話され、原子爆弾であったとか放射能被害などということは解っていませんでした。教室のあちこちで「水を…！水をくれ！」という声が続いていました。

水を求める患者さんが大勢いるのに、どうして水を運ばないのか、不思議でした。学校の二階の教

室に比較的軽傷の患者さんが運び込まれ、一階の教室には重傷患者さんが収容されていました。私は重傷患者さんが小さな声で求めた水をやかんで運び、飲ませてあげようとした時、看護婦さんから、「水を飲ませてあげると死ぬことになるのよ！」と叱責されたことを覚えています。

しばらくして、看護婦さんから、二階の患者のところで介護するよう指示され、二階に行きました。二階の患者さんも、「暑い…水をくれ…」と繰り返しもとめられ、また「起こしてくれ…！」「寝かせてくれ…！」とも言われ、なかなか、思うように対応できませんでした。

とにかく、暑さをしのぐために、うちわで懸命に扇いであげました。看護婦さんの指示で、水を与えることが許可された患者さんには水を飲ませてあげようとしましたが、口元がひどい傷になっていて、水を口の中に流し入れることがむつかしい状態でした。看護婦さんに相談すると、脱脂綿に水を含ませ、口の回りを湿らせて処置したのです。患者さんは脱脂綿を懸命に吸って水分を採るような状況でした。

三日目ごろから、ほとんどの患者さんは、火傷して黒ずんだ皮膚になっていたところが水ぶくれになり、その部分から膿みが流れ出るようになりました。私たちが布きれを使って流れるように出てくる膿をふき取ると、婦人会の皆さんがそこを包帯で治療されました。次の日に病室（教室）に看護にいってみると、膿みで湿った部分にハエが黒いほどついていて、大小の蛆がびっしりついていました。蛆は脇の下のところに最も多くついていました。また、多くの患者さんの口にも蛆がついていたので、おかゆをたべさせてあげるのに苦労しました。スプーンを横にして口のなかにおかゆを入れてあげま

したが、ほとんどは口の中に入らず、こぼれてしまうような状態でした。
教室の中は、患者さんの体から出てくる臭気で気分が悪くなり、教室からはなれることもたびたびでした。
ひとりの患者さんの黒く焼けただれた背中から膿みが流れでていたところの皮膚がすこし乾き、膨れ始めたころ、その中にハエがつぎつぎに入っていくのを見た時、何とも言えない気持ちになりました。
「暑い…痛い…」と繰り返し訴えていた人が次第に動かなくなっていかれ、気の毒でした。
また、水を飲ませてあげようとしてなにかにつまづき、患者さんの頭部に手があたったとき、髪の毛がつるりと抜け落ちたのでびっくりして看護婦さんに声をかけ、手当てをしてもらったことがありました。その時、その患者さんが何の痛みも無いような表情だったので、そのことにも驚きました。
患者さんは、暑さと蛆に噛まれるいたさと吐き気のするような悪臭のなかで、「もっと（うちわで）扇いでくれ…！起こしてくれ…！寝かせてくれ…！」と何回も叫びつづけることもありました。軍医の藤高先生が、すこしは我慢しろ！と怒鳴られたこともありました。
私は、午前中二日に一回、三日に一回の救護活動参加でした。私を見つめて、にっこり笑って、「蛆が頭の中にはいると気持ちがいい…」と話した兵隊さんは、二日後には亡くなっておられました。精神的に正常さを保つことができなかったのだと思います。
その年の夏休みが終わりに近付いて、回復された患者さんたちは帰郷され、空室になった教室を掃

除しました。汗と膿みのあとが染みついた床は何回雑巾で拭いてもきれいにはなりませんでした。
戦争が多くの人間になにをもたらすのか、その現実を見続けた夏でした。

（五）収容当時の山内西国民学校平面図

被爆者の方より感謝のことば（辞）

福山市草戸町　渡部美香（旧姓　橘）

突然の不躾お赦し下さいませ。

〇月〇日付読売新聞紙上にて「庄原原爆の記録」の記事を拝見致しまして、お礼の手紙の書ける機会のできましたことを本当に嬉しく思います。

昭和二十年八月九日（軍属として最年少？十五才の少女）山内西国民学校に収容されました一人でございます。

山内町の皆様、故人になられた方も多いかと存じますが、その節は本当にお世話になり有難うございました。不本意ながら二十六年余の今日まで失礼してしまいましたが、当時の想い出、皆々様のご恩は一時として忘れたことはございませんでした。駅に出迎えて下さった白いエプロン姿の白い色、果てしなく続く負傷者の群れ、馬車、大八車、校舎に敷きつめられた香るような木綿の敷き布団のなつかしさ。割り当てられた一本一本のうちわ、箸にも茶碗にも皆様の真心が感じられて本当に倖せでした。手助けできる者は早く帰郷させるとのことで三十八度四分ぐらいの熱をおして看病にあたり、八月二十四日帰郷致しましたが、それまで六十四名が亡くなられたとか伝え聞いたように思います。

広島では死者は先端から大八車に山積みされ、あちこちの凹地に放り込まれて葬られていましたの

に、山内では、私共の目には懐しい法衣をまとった僧侶に読経され白木の棺に納めうれて裏山を登っていました。（葛城山麓）

ここで亡くなった人達は、どんなにか浮かばれるだろうと毎日眺めたものでしたけれど…昨年九月、被爆して別れたまま相見る機会もありませんでした同級、下級生の会がもたれ追悼会が催されましたが、皆々様のお蔭で一K米地点で被爆した同僚即死以外は一名も欠けていませんでした。

お世話になりました方達も私同様一生感謝の気持を忘れることはないものと存じます。

お礼に出向けないのが残念ですが、何かの機会がございましたら、被爆者の一人が厚くお礼を申し述べていたとお伝えいただければ倖せでございます。

町内のご発展とお倖せを祈りながら乱筆乱字にて失礼させていただきます。

母の霊碑に参拝して

畑　中　純　恵（旧姓竹本）

被爆五十七年目の今夏、思いもかけず亡き母の記名の墓標が死亡の場所に建てられているということは、夢にも思っていませんでした。それだけに貴地区皆様の暖かい御協力があって、仏も安らかに眠っていることを憶うと、万感胸に迫って合掌させて頂きました。

本当に有難うございました。

半世紀以上も過ぎた今も、八月六日を迎える度に被害の惨状が報道されていますが、当時の私（純恵）は広島市観音町の三菱造船で女子挺身隊で作業中、屋内で被災、翌七日、指定避難先の安佐郡安村で健在であった父、弟と再会し、そのあと基町の広島第一陸軍病院で服務していた母を捜しに旧市内を尋ね歩きましたが見つからず、私と弟は一度母の実家の加茂郡安芸津町に身を寄せました。

市内に留まった父は、幸いにも市街周辺の戸坂小学校で母と会うことができました。

これも顔面行状の変った姿に父の方は気付かず、母の方から「お父さん」と声をかけられたそうです。ただその時、私達子供二人は無事であることを告げたということで、母も安堵したことでしょう。その時に、庄原分院のほうへ転送されることを知った父は、安芸津町にいた私と弟を連れて芸備線に向かいましたが、十二日早朝に息を引き取った母に会うことはできず、荼毘に付された遺骨を引き取っ

て帰った記憶がございます。

その後、焼尽の寺町から三境墓地に移した竹本家のお墓には、昭和二十八年に結婚して大阪に移り住んだ私は、毎年事ある度に墓参をしておりますが、母昇天の場所に慰霊の碑が立てられているとは、露ほども存じませんでした。ご領布いただきました被爆体験記「葛城」を拝読しまして、今更ながら往時の被災者看護のため、山内の皆様が一体となって懸命の努力をして頂いた様子が紙面を通じて伺い知れ、脳裏に浮かんで参りますし、特に高茂町の谷口文江様、大下アサコ様のご寄稿には、同じ陸軍病院で勤務していた母が同僚の看護婦さんの手厚い看護で、身罷かつていった光景を想像しますと、涙禁じえません。

すでに、父、弟も他界して広島の原爆塔に母と合祀されており、本夏も私ども夫婦で日帰りで広島の墓参の乗車券を準備していましたが、たまたま八月三日の朝日新聞夕刊の記事を主人が読んで、死亡診断書の山内病棟の文字が甦り、急遽庄原一泊に予定変更して訪れた次第です。最近各種の報道にもあるとおり、被爆者の老齢化もすすんで、私どもも何時まで広島まで行けるか判りませんが、皆様のご加護によって金魂されている亡き母に代わりまして、重ねて有り難くお礼申し上げます。

どうぞ関係のみな様方によろしくご伝言くださるようお願いいたします。

平成十四年八月十四日

庄原市山内地区

原爆被害者の会　会長　加藤　照明様

死亡診断書

一、氏名　竹本小雪

二、出生ノ年月日　明治四拾貳年壹月貳拾貳日

三、部隊號　廣島第一陸軍病院

四、官等級　陸軍看護婦

五、病死自殺其他変死中其ノ別　戰傷死

六、病名　火傷第二度（顔面頸部前胸部両手背）

七、發病ノ年月日　昭和二十年八月六日

八、死亡ノ年月日時　昭和貳拾年八月拾貳日午前五時貳拾分

九、死亡ノ場所　廣島第一陸軍病院庄原分院山内病棟

右證明ス

昭和二十年八月十二日

廣島陸軍病院附陸軍軍醫大尉　藤高茂明

後　記

今の度、葛城二号を発刊するにあたりまして遠方の方、地方の方々から多くの投稿・お話しを寄せて頂きました事に厚く感謝致します。

特に今度の二号は広島で被爆された軍人さん、看護婦さんが戸坂より汽車で山内駅に送られ来られ、山内小学校に野戦病院・山内分院が設置されて二七〇名を迎えました。

物資のない時なので自分の浴衣をほどいて包帯にして持って行ったり、野菜、食物を持ち寄り村民一丸となって看病・看護の手伝いを致しました。死亡された八十八人の方は裏山葛城山の麓で割木を積んで荼毘にふされました。

二号では野戦病院、山内分院での看護の状況、その前後の様子を主体に編集して頂きました。

被爆から五十七年と時が経過し体験をされた方々も少くなり、それに加えて記憶も薄らいで行く中にあってあの悲惨な出来事を後世に伝え二度と原爆の使用がない事を願うものです。

山内地区原爆被害者の会　副会長　土井　昭二

（第三種郵便物認可）　中

庄原・山内

忘れ得ぬ53日 ●●●

<中>

つないだ生命

19歳士官 地域の恩今も

被爆の傷 母子癒やす

「被爆直後、『もう長くはない』と、医者から言われていました。でも、どうにか元気にやっています」。大阪市住吉区で整骨院を開いている楯川義徳さん(七)。山内西国民学校（庄原市山内）の病棟で一命を取り留めた百八十六人のうち、所在が分かっているただ一人の健在者だ。

十九歳、陸軍の見習士官だった。岡山市の部隊から広島市の将校教育隊に異動した二日後、広島城近くで被爆した。

首のほぼ全体、背中、両手、両にやけどをして「ズルズルの状態」だった。芸備線山内駅から病棟へは自力で向かった。「顔の腫れがひどく、目が開かない。目の上下を指で広げて歩きました」

病棟は二階建て。重傷者を収容する一階に楯川さんも入った。日を追うごとに病室の患者は減っていった。前日には食事を運んでくれるほど元気だった人が、翌日には容態が急変して死んでしまう。「放射能のせいでしょうか」

突っ張る皮膚の痛みを耐えた三週間。やけどあとに新たな皮膚ができると、退院を促された。二十人いた同じ病室に残るのは十人ばかりになっていた。

「人ごとでない」

山内駅近くに住む金藤嘉宏さん(七二)は当時、十五歳。収容された患者を見舞う肉親を泊めていた。楯川さんの母親も大阪市から駆けつけ金藤さん方から義徳さんを見舞った。

楯川さんは、金藤さんの母シノブさん＝当時(七七)＝の言葉が今も頭から離れない。「夫も兵隊で中国に行っています。誰かのお世話になっているはず。人ごとではありません。うちで療養しなさい」

楯川さんは、母親とともに金藤さん方で世話になりながら伏方へと向かった。楯川さんは「ごちそうをしてもらった。当時、貴重だった牛肉料理が忘れられない」。嘉宏さんも川でコイやハヤ、カワニナなどの食料を捕った。楯川さんは、虫に食われて早く熟した「虫熟れ」の柿を食べた麦粉が好物だったという。

はなむけの草履

十日ばかりの療養。シノブさんの「頑張って」の言葉に送られ、芸備線で山内を後にした。草履はシノブさんが作ってくれた。「軍靴で帰るには重すぎるだろう、と母は案じたのでしょう」と嘉宏さんは振り返る。

やけどのあとや左耳の後にウジが開けたというが残る楯川さん。現在も五、六十人の患者の治療に当たる。「今生きていられるのは、金藤さんのおかげです。命の恩人です。地域の人たちに親身になって救ってもらったことを忘れることはできません」

シノブさんは一九九三年に八十六歳で他界した。「こうしょうるかなあ」。暑い夏の訪れとともに、楯川さんを案じる言葉が口をついて出ていたという。

金藤嘉宏さん

故金藤シノブさん

「今の私があるのは山内の人たちのおかげ」と繰り返す楯川さん

（2002年８月１日　中国新聞）

2003年７月発行
発行　庄原市山内地区原爆被害者の会
広島県庄原市山内町813－４
山内公民館内
電話（08247）４－0451
編集　庄原市山内地区被爆体験記編集委員会
印刷　㈱ニシキプリント